

源氏物語の研究

田宗俊著

昭和二十九年六月二十五日 第一刷發行

源氏物語の研究

定價四百參拾圓



著者 武田 宗俊

發行者 岩波 雄二郎

印刷者 白井 知一

發行所

東京都千代田區
神田一ツ橋三

株式會社

岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

序

この書を構成する三篇のうち、最初的一篇「源氏物語の成立過程」を扱った論は、大部分雑誌「文學」や「國語と國文學」にすでに發表したものである。これ等の發表は一部分ずつバラ／＼になされたが、互に關連して居るので、一書としてまとめて讀む方が著者の論旨を理解していただくに好都合と考える。源氏物語の研究書は平安末期以來數えるにたえない程多いが、作品の成立過程について學的に考えたものは從來殆んどなかったようである。ここに集められた研究はその領野に於て新しい境地を開いたものといつてよいであらう。この書の結論に就いては、すべての人からは認をうけることは、當分望むことが出来ないかも知れないが、論は空裏に臆測を逞しうしたものでなく、事實の上に立つて居るので、こゝに論據として提示した事實が、問題を含んで居ることは何人も否定出来ないであらう。私は元來文學史の研究者として、文學理論と文學史的事實の研究とを關連させて進めることを志して來た者である。現在文學はその創作、鑑賞、批評等に於て世界の文學との關連に於て行われて居るので、我國の古典に對しても、その鑑賞、批評、研究方法等に於て國文學の中世以來の傳統の中にだけ止つて居ることは出来ない。しかし國文學界では文學理論や研究方法に於て眼を充分に廣い世界に開いて居るものが少いのでないかと思う。私はこの點を遺憾に思い、ドイツやイギリス、アメリカ等の文學理論書に眼をさらすこと數年、いさゝか得る所があつて國文學の研究にかえり、自分の親しく感じて居た平安時代の文學について、その發展のあとをたどり、作品

の内容や價值について新しい光をあてて見たい念願をもった。だがこの企てはすぐ大きな障壁にぶつかった。平安時代の作品、殊に散文の作品では、どんな人が作ったか、何時作られたか、どんな風に成り立ったか等の事實について知られて居ることがあまりに少いことである。作者も成立年代も、成立事情も、無視した研究や批評が、嚴密に歴史との關連に於てなさるべき學問に高い價值を要求し得ないのはいうまでもないであらう。一時日本文藝學という學が問題となった。それは文學作品の作者や成立年代や成立事情等の研究はすべて文獻學者に任せて、専ら作品の美的性質や價值等を研究しようとするものようであつた。文學の研究がたゞ作者、成立年代、成立事情等の外的事實の研究に止つて、內的性質の究明を輕んずるのは不可である。從來の國文學研究にはこの弊がないでもなかつたので、日本文藝學の提唱は理由のないことではなかつた。たゞ今日の國文學の立場では、文學史上の大部分の作品に就いてまだ文獻學的研究が充分になされて居ないので、文獻學的研究の一方をきりはなして、作品の文學的性質だけを追求することは不可能と考えられる。私の文學史研究も文獻學的研究を伴うことなくしては進められなかつた。この文獻學的研究が、長い傳統を持ちながらなおその成果が不充分と考えられるのはどこに原因があるであろうか。これまでの研究方法が専ら文獻に記述された外的事實にだけよつて、内部の分析が不充分であつたことも一の原因に違ひないと思われる。作品は時代の産んだもの、個人の手になつたもの、又各々特殊な事情のものになつたものとして、その時代や、作者や、成立過程は、文獻に見られる事實の外的記述にだけでなく、その作品の內的性質形態をも、限定してその上に痕跡を残して居るに違ひない。作品の內的性質形態の究明は又逆に作者、時代、成立事情の究明に役立つのである。この篇の論は研究領域を源氏物語に限つて居るので、せまいが、その研

究方法に於ても、從來の行方よりやゝ廣めたかと考える。私はこゝに用いた方法によって更に伊勢物語、竹取物語、宇津保物語その他の作品に就いての研究の草稿を用意して居り、機會を得て刊行したいと考えて居る（一部分は雑誌に發表したが）。そこではこの方法は更に多様性を以て用いられて居る積りである。

第二篇「青表紙本と河内本の比較研究」は本書で初めて發表するもので、兩本の價值を學的に決定しようと思ひた。これは成立過程の研究に於て源氏物語の本文を嚴密に讀んだ結果、青表紙本に誤りが多く、河内本に原形を存すると推定せられる箇所が多く見られたので、之を根本的に究明したいと考えたのである。こゝでも私は出来るだけ多面的に論證を進めて誤りの少いことを期した。これは從來の見解に異を立てようというような先入感から出發したものでなく、事實を究明して眞實にせまろうとしたものである。讀者はこの篇の結論が從來の見方から異るとの理由から直ちに反對の態度に出られることなく、提示の事實を見てほしい。

第三篇は文獻學的研究より進んで作品の内容にせまろうとしたものである。この領域は私の最も重きをおきたい所であるが、こゝにのせたものはもとより短いもので、意をつくして居ない。この物語の内容や評價等の批評的研究については又別に一書『源氏物語論』の稿を用意して居り近く刊行したいと考えて居る。そこに於てもその内容の分析や批評方法に於て私なりに一の方法を用いた積りである。この書をよまれた方に次の『源氏物語論』をもよんでいただければ仕合せである。

本書に集められた論が始めて「文學」その他の雑誌にのせられ、又このような一書として刊行されるにいたつたことに就いては土居光知先生、西尾實先生、岩波書店の布川角左衛門氏等の方々からの好意によること多大である。

感謝にたえない所であるが、これは私一身の上に好意だけでなく學問の進歩のために私のない熱情からなされたもので、又深く尊敬の意を表する次第である。

一九五三年十一月

著者しるす

目次

第一篇 源氏物語の成立過程に就いて

第一章 源氏物語の最初の形態……………1

第二章 源氏物語の最初の形態再論……………20

第三章 「並の巻」に就いて……………27

第四章 卷々の頭尾に就いて……………32

第五章 「輝く日の宮の巻」に就いて……………33

第六章 「紅梅の巻」の位置……………101

第七章 「竹河の巻」に就いて……………111

第二篇 青表紙本と河内本の比較研究

第一章 序……………125

第二章 源氏物語繪卷の詞と青表紙・河内本……………128

第三章 源氏物語釋の引用文と青表紙・河内本……………133

目次

二

第四章	青表紙本と河内本との本文比較	一三三
第五章	巻尾の終結形式より見たる兩本の比較	二〇五
第六章	藤原定家の古典校訂の態度	二二三
第七章	源親行の校訂態度	二三九
第八章	結語	二五六
第三篇	源氏物語の本旨と構造	
第一章	源氏物語の本旨	二二九
第二章	物語の構造	二三六

第一篇 源氏物語の成立過程に就いて

第一章 源氏物語の最初の形態

一

源氏物語の構成は從來主人公によって光源氏を中心とする部分と、薫大將を中心とする部分との二に分け、これを正篇・續篇又は前篇・後篇と呼んでいるが、これは最近池田龜鑑博士も論じておられるように、前篇を更に二つに分け、合せて三部として、第一部・第二部・第三部とよんだ方がよい。その境目をなす所は、第一部藤裏葉の巻の終、第二部は幻の巻の終で、以下が第三部である。源氏物語の成立の上で問題を含むのは、第一部と第三部とであるが、第三部の問題については次に譲り、こゝでは問題を専ら第一部に限ることとする。

第一部は複雑な構成を持っている。それは直線的に發展進行する一つの筋の物語でなく、二系列の物語を組合せたものである。一方の物語は長篇的構成を持ち、光源氏とその戀人藤壺・紫上・明石御方との關係を中核とし、これに葵上・六條御息所・臘月夜尙侍・花散里・朝顔齋院等と源氏との戀物語を錯綜させたもので、これが第一部の本筋をなしている。今一方は短篇的な説話をつらねたもので、主人公光源氏と空蟬・夕顔・末摘花・玉鬘等との戀

愛關係を描いており、各箇の説話は一見ばら／＼のようであるが、それ等の説話のすべては一つの源、帚木の巻の雨夜の品定から出で、相關連して又一の統一を保っている。今便宜上前の長篇的な物語を、中に特に重要な女主人公によって、紫上系の物語と名づけ、後者を同じく玉鬘系の物語と名づけることにする。

第一部の卷々のはっきりとこの二つの系に分れている。前者に屬する卷は、桐壺・若紫・紅葉賀・花宴・葵・神・花散里・須磨・明石・落標・繪合・松風・薄雲・槿・乙女・梅枝・藤裏葉の十七帖、後者に屬する卷は、帚木・空蟬・夕顔・末摘花・蓬生・關屋・玉鬘・初音・胡蝶・螢・常夏・篝火・野分・行幸・藤袴・眞木柱の十六帖で中間に立つて所屬のまぎらわしい卷はない。この兩系の卷々は上記の通り相交錯し、物語は並行して進んでいるが、その結びつきは奇妙な形をとっている。先ず紫上系の物語は玉鬘系の物語とは獨立し、完全な統一を持つものとして、後者に無關係である。即ち源氏物語第一部から玉鬘系十六帖をのぞいても何等かける所のない物語となっている。玉鬘系の物語は紫上系の物語を背景とし、その系の物語をも取り入れているが、それはたゞ影を落すのみで、その物語を玉鬘系の巻の中に於て發展させてこれを紫上系にかえすことはない。玉鬘系の物語は、松にからみついた藤のように、外見は一體をなしているが、その本を異にし、附加的結合で、有機的な融合とはなっていない。一般に一の物語に二つの筋が並行して進められることは珍しいことではない。しかしその場合、二つの筋は有機的にきりはなすことが出来ぬよう結びついているか、そうでない時も、相照して對照の效果を示すように工夫せられる等、技巧上の理由を持つものでなければならぬ。源氏物語第一部に於ける兩系の筋の結合は甚だ機械的であり、又技巧上の理由によるとも考えにくい。その上兩系の物語の接續も甚だ不自然である。桐壺の巻と帚木の巻、夕顔

の巻と若紫の巻との接續の不自然さ、その間に存する切斷は一見して明かであるが、こゝには缺巻が考えられ、問題が複雑なので別論に譲り、今はふれないでおく。紫上系の巻々を一の連續した物語として見ると、若紫の巻から紅葉賀へ續くが、その續きは主題の上からも年月の上からも極めてなだらかである。即ち若紫の主題は源氏の紫上發見迎取りと、藤壺との密通とであるが、紅葉賀の巻では、紅葉の賀宴を機縁としての源氏と藤壺との關係、二人の間に罪の子の誕生、迎取った後の紫上の様子等で、若紫の巻の自然な發展であり、年月も若紫は源氏十八歳の三月末から始めて同年十月まで、紅葉賀はこれを受けて、十八歳十月から翌年秋までのことを記し、順序よく年月を追うて進んでいるが、この間に玉鬘系の末摘花の巻が入りこんで、全く別系の物語により紫上系の物語が切斷せられ、年月も若紫の起筆より更に遡って十八歳の二三月から筆を起し、翌年の春までに及んでいる。その爲上記三巻のつぎ目に時序の不自然な逆行が二度も行われる。いうまでもなく物語は必ず年月の順序に従って敘事を進めねばならぬときまったものではない。しかし年月の順序に従うのが原則であり、この原則を破るには、構成上又は技巧上の理由がなければならぬのである。末摘花の巻前後の逆行にはその理由が見出し難い。このことは蓬生・關屋兩巻の前後に於ても同じい。その前巻、紫上系の滯標では秋好中宮の入内の準備で筆を擱いているが、同系の次の巻繪合では、中宮入内から筆を起して、そのつゞきは自然であり、年月も滯標は源氏二十八歳から二十九歳を通り三十歳を中宮入内の準備の中に含めているが、繪合では三十一歳から筆をつづけている。從來年立に源氏三十歳を事件の空白の年と見ているが、これは前述の通り中宮入内準備の中に含めたもので、嚴密に言えば誤である。この兩巻も事件に於ても年序に於てもつゞきが自然でその間に別巻を介入せしむべき間隙はない。そこへ玉鬘系の蓬生・

關屋二卷の別物語が入った爲、主題中斷の外、滯標の終三十歳から蓬生の二十八歳に逆戻りし、關屋の終は三十一歳、繪合をこえて松風の初の時まで及び、次の繪合で再び遡行させている。玉鬘の卷から眞木柱にいたる一群の卷の前後に於ても年月の逆戻りはないが、その前後の卷乙女と梅枝はその主題が續いており、中に異分子が入って紫上系の物語を中斷した形となっている。

このように物語が截然と二つに分れていること、その結びつきが甚だ不自然で機械的であることは如何なる理由から生じたものであろうか。これについて空蟬や末摘花等の物語は史記の列傳の如く、一二卷にまとめる爲、年序に順わなかったものと見ようとする人もある。しかし空蟬や末摘花等は一二卷にまとめられてのみ敘述せられているのではなく、紫上系に出て來ぬだけで、玉鬘系の卷では散在的に敘述されており、列傳的敘述との理由では説明出來ぬ。これが最も合理的な説明理由は、紫上系十七帖が先ず構想記述され、玉鬘系は後に記述挿入されたと見るところである。こう見ると、紫上系十七帖が獨立してかけるところのない物語を作っていること、玉鬘系は紫上系物語を前提とし、之に附加の形で書かれていること、その結合が機械的で、自然につゞく紫上系の所々へ玉鬘系の一巻、もしくは數卷を無理に挿入した形になっていること等が、容易に説明せられるのである。もし兩系の説話が始から一緒に構想されたものなら、有機的に結び合つたものとして作られ、事件の年月も不自然な逆行を繰返すように構想されなかつたに違いない。

この説はあまりに突飛なものとして、容易に贊同を得難いかも知れない。しかし源氏物語が今日の卷の順序によつて書かれたものでなからうとの疑は和辻博士⁽¹⁾、青柳秋生氏⁽²⁾、池田龜鑑博士等⁽³⁾によつてすでに提出されているの

である。源氏物語は今日の巻の順序によって成立したものと見ようとすると上述の外幾多の矛盾を藏しており、それ等の一部は前記の諸氏のあげておられる所で、是等先人の説を徹底させれば、當然こゝに落ちつくべきものと考へる。

論の方向を明確にする爲、今一つ結論となるべきものを附加しておく、源氏物語は初め紫上系十七帖のみが獨立して構想せられ、それだけで完結していたものと推定せられる。この十七帖が原源氏物語と稱すべきものである。

以上はこの論文の結論を先ず示したものである。源氏物語の成立についての考え方如何は、この物語の解釋上甚だ重要な意義を持つていたので、このような説は安易な抽象的推論によって輕々しくなすべきものではない。この斷定は源氏物語の本文を細心に考慮し、他の文獻との關係をも考え、幾多の動かし難いと信ずる論據の上に立って下したのである。以下その論據を列舉しよう。

二

すでに紫上系の卷々は獨立して、玉鬘系の卷々とはなれてゐることをのべたが、前者が先ず書上げられ、後者が後に記述挿入されたとすれば、紫上系卷々の記事には玉鬘系の記事に關連して書かれたところ、それを前提して書かれた所はない筈である。いいかえれば玉鬘系十六帖を取去っても全然紫上系物語の理解に支障がなかるべきである。果してそのような所が全くないか否かがまず吟味せられねばならない。紫上系十七帖にわたってこの點で問題となる所は甚だ少いが、四五箇所疑われそうな所がある。

その第一は葵の巻に存するもので、源氏が葵上の死を悲しむ際、人の死を

常のことなれど人一人かあまたしも見給はぬことなればにや、たぐひなく思しこがれたり。

と記した所である。從來の註では何れもこの「人一人」を夕顔をさすものと見てゐる。こゝが源氏物語にはじめより存したまゝで、しかも夕顔をさすに違なければ、玉鬘系後記説は崩れるわけである。しかしこの「人一人」は必ずしも夕顔と見なければならぬわけではない。源氏は三歳に母を失ひ六歳に祖母を失うており、後者では「此度は思し知りて戀泣き給ふ」とあるからそれをさしたものと考えられぬ譯でなく、それがあまり若年の記憶として不可なら、こゝを後の挿入と考えることも可能である。この文の前後を考えるとむしろない方が自然と思われる。源氏物語が一回的起草のまゝ、完全に傳わっているものでなく、意識的無意識的に變化を與えられていることは異本の存在とその形態が明かに示している。

その次も葵の巻に存するもので、源氏が葵上の死後、その喪に籠り頭中將と雜談して好色の老女源内侍のすけをはさんでの滑稽な事件など語り合う所に

かのいさよひのさやかなりし秋のことなど、さらぬもさま／＼のすきことどもを、かたみにくまなくいひあらはし給ひて、

とあり、これも從來の註では、末摘花の巻で源氏が十六夜に末摘花を訪ねるあとを頭中將がつけて、微行の輕舉をいさめる條をさしたものとしている。しかし源氏が末摘花を訪れたのは、月朧なる春の十六夜で、「さやかなりし秋」ではない。「十六夜のさやかなりし、秋のことなど」と句讀して、兩者別の時をさしたものとする説もあるが、

無理な解で、しかも「さやかなりし」の語の意義も上記のことをさしたとしては解せられない。これは本來あったものとしては合理的に理解出来ない所で、後のさかしらな挿入と見る方が自然である。紫上系十七帖中、事件で玉鬘系に関連あると見られて來たものは以上の二箇所のみである。（この點は青柳氏⁽¹⁾も指摘して居られる）

次に人物で玉鬘系を前提としたかと疑われるものが二三あるので吟味して見よう。その一は惟光である。（表一参照）これは現在の卷の順序によると夕顔の卷に始めて出で、次で若紫・花宴以下兩系に現れているので、若紫の惟光は夕顔の惟光を前提としたとも考えられるが、これはむしろ若紫以下紫上系にあった人物を夕顔の卷にあげ用いたものと見たい。そのわけは玉鬘系の夕顔・末摘花では、惟光を乳母の子としているが、紫上系では乳母の子たることは暗示すらもなくたゞ源氏の忠實な侍臣として描かれている。これが本來の形であり玉鬘系のは後から附け加えたと推定されるからである（このことはすでに池田龜鑑博士も論じておられる）。

第二は右近のぞうである。この人物は葵の卷に初出し、須磨・滯標・關屋・松風の諸卷に出ている。關屋の卷によると空蟬の卷の人物伊豫の介の子、紀の守の弟となっており、玉鬘系の卷の人物の如く見える。しかし葵の卷以下紫上系の卷では伊豫の介の子であることは全然出ておらず、たゞ親が地方官として常陸に下ったにも拘らず、源氏のもとに止ったよしが須磨の卷に見え、これが關屋の卷に前伊豫の介が數年前常陸に下ったとあるのに呼應して、玉鬘系の人物たるを證しているように見えるのである。しかしこれも初め紫上系の人物だったのを、後玉鬘系を書くに當って、結びつけたものと見ねばならぬようである。そのわけはこれが始より玉鬘系の人物だったのなら、葵の卷に初出の際必ず伊豫の介の子として紹介せられるべきだからである。紫上系に初出以來同系の卷全部にわたっ

て玉鬘系の暗示がなく、玉鬘系の巻にのみ伊豫の介の子としてあるのは、むしろ玉鬘系後記説の味方をするものである。最後に問題となるのは朝顔齋院である。葵の巻に

かゝることをきゝ給ふにつけても、朝顔の姫君はいかで人に似じと深う思せば、はかなきさまなりし御返りなどもをさゝくなし。

とあるのが紫上系の巻での初出であり、すでに朝顔の君の名が既知のものとして提示されており、それ以前の提示としては玉鬘系帯木の巻に、空蟬の侍女等が源氏の噂をして

式部卿の宮の姫君に朝顔奉り給ひし歌などを、すこしほゝゆがめて語るもほの聞ゆ。

とあるものの外ないのでそれによつたものではないわけにはいかない。これが玉鬘系巻々後記説の唯一の片附けにくい難關である。しかしこゝは幾多の問題をはらんでいる所で、或は第一部成立の祕密をひらく鍵の一つがこゝに存するかも知れる所である。その第一は姫君に朝顔奉つた歌をほゝゆがめて語るのも聞えるところがあるが、その事實は帯木以前の巻に全然記してない上に、十五年後、槿の巻に、源氏が朝顔をこの姫君に奉つて歌をおくつたことを記していることである。朝顔と歌をおくつて朝顔の姫君と呼ばれた人に、同じ場面を繰返し記述することは、すぐれた物語作者のしそうなことではない。前の記事を忘れて、再び繰返したと見ようとしても、朝顔の姫君と呼んでいる人に、その名の由來を忘れて同じ場面繰返しの過失を犯すことは考えられない。第二の疑問は葵の巻の朝顔の姫君についての記事は、充分已知のものとして示されているが、姫君については帯木の巻が前に書かれたとしても、たゞ名があげられただけでこの葵の巻がはじめての紹介といふべきであるのに、そのような書方ではない。こ